

【学位論文審査の要旨】

論文提出者： 劉 森

論文題目： 『金瓶梅詞話』における“畢”・“罷”・“訖”の研究

学位の種類： 博士（文学）

課程・論文の別： 課程博士

論文審査委員 主査 首都大学東京准教授 荒木 典子

副査 首都大学東京教授 佐々木 睦

副査 首都大学東京名誉教授 落合 守和

審査結果

本論文の公開審査は2017年6月24日（土）午後2時より、5号館1階134室において行われた。

この論文が最もすぐれているのは次の三点であると思われる。

- ・『金瓶梅詞話』の三つの動詞“畢”・“罷”・“訖”（動詞に後置される場合を含む）のすべての用例を取り上げることが明記した、国内外において初めての計数研究である。
- ・『金瓶梅詞話』と同じ明代の『水滸伝』、『西遊記』、それに続く清代の『紅樓夢』、『儿女英雄伝』、四つの作品の三つの動詞“畢”・“罷”・“訖”（同上）のすべての用例を取り上げ、それらの用法と『金瓶梅詞話』の用例との異同を検討する初めての計数研究である。
- ・上記2点に基づき、『金瓶梅詞話』のいくつかの文法特徴について、新しい視点を提供することに成功している。

動補構造はかねてより研究されているものであるが、現代中国語でも使用されている“了”などを中心に据えたものが多い。文言にはなかった要素が、口頭表現が記録されるようになってから見られるようになり、現代の標準中国語に採用される過程を追うというのが本論全体の趣旨である。本論文では、文言的な要素である“畢”・“罷”・“訖”が口頭語資料に見えることに取って目をつけたところが挑戦的である。結果として、会話文と地の文を接続するという極めて限定的な用途が圧倒的に多いということを確認したが、少数ながら会話文中にも用例を発見した。かつ、そのような会話文は地の文と大差のない文体である。明清時代の口頭語による小説は、見て聞いて楽しむ講談が読んで楽しむ小説に固定されていく過程を表現していることが知られている。地の文はすなわち講釈師のことばの再現である。会話文と地の文の文体の差の有無はこの固定の過程を解明する上で示唆に富むのではないだろうか。

問題点として、当初に目的として示した項目に対してすべて結論を出したという点では成功しているものの、より大きな目標が見えないことが挙げられる。『金瓶梅詞話』の特徴を次々に指摘しているがその先の目標は何か、この謎多き作品の正体を明らかにする鍵となりうるのか、ということが指摘された。また、報告者が行った前置する動詞の表す動作を意味で分類する作業には賛否（有効な結論が得られていないとする意見、意外な結びつきを発見でき

たという意見）がわかれた。その他にも、いくつかの例文の解釈、「接続用法」など用語の妥当性にはなお検討の余地がある、といった指摘があったが、報告者は謙虚に受け止め、今回自分で直に確かめた根拠をもって応答した。会場では質問が途切れることがなく、議論も多岐に渡った。今回の応答を通じて報告者が十分な学識を有すること、また日本語の口頭表現にたぐいまれなほど卓越した能力を有することが確認された。特に、大部の作品を五つも調べ上げた忍耐力、巻末に全用例を挙げ、解釈について後人の批判を受け止める姿勢を見せたことは評価でき、今後の研究の発展性が期待される。

以上より、審査員一同は本論文をもって劉森に博士（文学）の学位を授与することが適切であると判断した。